

## 温泉山史蹟めぐり

### ①三鈷の松

小地獄から一切経堂への参道の途中に空海さん伝承の「三鈷の松」があります。杉の巨木が立ち並ぶ深山幽谷の地にある



三鈷の松

「一切経の滝」は雲仙開山の伝承がある奈良時代の僧行基菩薩が修行されたと云われています。

普通の松は、葉が二本ですが「三鈷の松」は葉が三本に分かれています。伝説によると、約1200年前、弘法大師が唐(今の中国)での修業を終え帰国の折、「日本で最初の修業地を示し給え」とお祈りし「三鈷杵」

(修業僧の身体を守る役目をする法具で、弘法大師の座像を見ると、必ず右手に五鈷杵ごこしよを持っておられます)を空に向けてお投げになり、帰国後、高野山の松の木に止まっているのが見つかったとされています。そこで、三本分かれの葉を持つこの松を、三鈷の松と呼ぶようになりました。

高野山では、境内で囲み祀られ「三鈷の松」をお守りとして販売されています。

ところで、雲仙は約1300年前からの霊峰日本百霊峰)で、全盛期には数千人もの



満明寺

僧が修業に励み、西の高野山と呼ばれ、女人禁制でした。

比叡山、高野山、温泉山は天下の三山霊場といわれ、「三鈷の松」がこの地にあるのは高野山との交流が続いていたころ、雲仙の修業僧の身体の保護を願って、高野山から移植したのではないかと云われています。

### ②大黒天



大黒天

1115(永久3)年仮院であった温泉山大乗院満明寺を再興(定僧上人という人が発起)し、その後次第に繁栄して一時は瀬戸石原(札ノ原)三百坊、別所に七百坊あり、雲仙一帯は比叡山、高野山と共に霊場として世の崇敬を集めていました。

温泉街から千々石方面への県道128号線をしばらく行くと「オシドリの池(貯水ダム)」湖面が広がっています。

池対岸の中間付近を注意して見ると鳥居があり、その奥の山林に「大黒天」が巨石に刻まれています。

高さ2m90cm、幅2m、頭幅70cm、頭高90cm、線刻(幅3cm、深さ1.5cm)の大黒天磨崖仏で、顔面だけ浮き彫りにしてあります。

大黒天の前面は別所ダムですが、ダム建設の前は、水田30町歩の田畑でした。大黒



天は、伝教大師最澄さいちようが比叡山に祀ったと伝えられ、後に日本では七福神になりました。

大黒頭巾を被り、右手に小槌、左手に袋を背負って米俵の上に立つ像です。

この製作年代については、確定はできませんが平安時代大乗院満明寺の全盛時代（800年代）から有馬貴純ありまたかずみが原城を築き、代々有馬の居城とした室町時代（1400年代）まで、さかのぼれないかと云われています。

### ③雲仙鬼石

雲仙の鬼石は、雲仙お山の情報館から、旧八万地獄に通じる遊歩道の、地獄寄りの雑木林の中にあり、高さ7m、底部周回約20mの大石です。

山領の鬼石に比べひっそりと忘れ去られた存在となっています。2～3人の雲仙在住のご老人から「子どもの頃、鬼石という大きな石の所で遊んだことがある」と聞く



雲仙鬼石

くらいで、殆ど知られていませんでした。

その後、歩道整備に伴い鬼石の入り口案内板が設置され、多くの人に知られるようになりました。

東西南北を、十二干支の卯う(東)、酉とり(西)、午うま(南)、子ね(北)で表わし、小地獄は木指名、別所はミョウバン浜と表記された、古い雲仙の絵図面があります。その中に、鬼石の場所が明記されており、温泉山縁起にも、「此の山ノ本主、歓羅は、四面ノ大鬼ナリ。行基菩薩二遇ヒ奉リ、種々ノ問答アリ。又、鬼アリ、男鬼ノ名ハ、空仙鬼、女鬼ノ名ハ、難林王ナリ。此の鬼々ヲ加持スレバ、即チ鬼石トナル」と記されています。

双方の大石の形をみて、山領の鬼石は、男鬼の空仙鬼、雲仙の鬼石は、女鬼の難林王ではないかと思われま

### ④温泉山石書法華塔碑銘

雲仙山満明寺境内入口の手洗い石の傍に、左肩が欠損した平らな石碑が建っています。

「伊勢渡海郡恵純謹建 1813（皇和文化10）年11月」とあります。碑文を要約すると、温泉山は渡海目標の山で、日本山と呼ばれ、天皇勅願による僧行基開山の由緒ある霊山と称えたものです。



温泉山石書法華塔碑銘



このことから、伊勢、熊野の僧との深い交流が伺えます。一方、伊勢、熊野の僧と雲仙の僧とが、一緒に唐に渡海していたことを刻んだ碑が、大阪、泉南市の林昌寺という寺に残っています。

「渡海行人、肥前国之住温泉山祐海上人 1564（永録8）年2月28日」と記録してあります。

渡海碑が現存するこの林昌寺は、真言宗御室派で、聖武天皇の勅願寺として、僧行基が開創、旧山号を温泉山と呼び、雲仙の祐海上人が、中興の祖と伝えられています。

ここ、満明寺と相通じていることがわかり、当時の修験道のネットワークが証明できます。

有明海沿岸には、玉名市報恩寺跡にも渡海碑が残っていると云われています。

加津佐の穴観音で有名な岩戸山も、当時、海辺の修行道場として、補陀落渡海信仰の地と云われています。

熊野、那智の海辺からの出発渡海は、平安時代から江戸時代まで、20名の僧が渡海したと伝えられています。

## ⑤片足鳥居

国道57号線を小浜方面から雲仙に登ると、温泉街へ入る前の札ノ原地区の国道左手に「小地獄入り口バス停」があります。その近くに片足鳥居が立っています。

温泉神社が四面社と呼ばれていた頃の第鳥居で1827（文政10）年9月12日北有馬北谷の八木与一兵衛が建立したのですが、地震が原因で壊れたのであろうと云われています。片足となり、その後道路の拡張や用地造成などで三分の二ほど埋まった形になっていたものを据え替えたそうです。



片足鳥居

鳥居は、又キの一部をつけた左側の柱だけですが、高さ4.7m、円周2.2m、重さ7トンの自然石でカサ石の一部と四面社と刻んだ石額も保存されています。

鳥居が壊れたのは、1866（慶応2）年の地震で、その時富津の中岩も壊れていました。当時は、片方の柱も台座もあったでしょうが、柱はどこかへ持ち去られ、台座は道路拡張で埋められてしまったか、いずれにせよ、ここは満明寺や温泉神社の門前通りと言われたところで、有家方面から雲仙へ入る唯一の道でした。昔はこの鳥居から上は女人禁制であったと伝えられている貴重な鳥居です。

## ⑥七日周りの石

温泉山は大乗院満明寺が繁栄したころ、高野山に次ぐ仏教の聖地でした。当時、修験道の霊峰は女人禁制とされ女の人は登る事が許されていませんでした。

女の人が登れたのは、雲仙札ノ原付近の片足鳥居（一の鳥居）までと千々石岳にあった女人堂（三つの土台石が残る）までであったと云われています。

一の鳥居から300メートルほど先の国道57号線の歩道から林の中に人知れず「七日廻りの石」があります。